

近江典彦：nMktaanaAous для بيانو

～ プログラム・ノート ～

「ンムクターナーアオウス」と読みます。初めの「ンムク」を無音で発音すると良いと思います。

для はロシア語で”for”、**بيانو** はアラビア語の”ピアノ”です。nMktaanaAous の意味は例によって各自考えて下さい。この作品が習作を除くと初めてのピアノソロ曲となりますが、これまで苦手な気があったピアノへの可能性を感じさせ、その創作意欲を与えてくれた松岡杏奈氏に感謝と敬意を表し、氏にこの作品を献上したく思います。

では早速ここで告知通り、皆さま御待望のクイズです！

Q：裏面にこの曲の中間部の楽譜が載っています。

この中の 75～88 小節目までに作曲者と初演者に共通する「とあるもの」が隠されています。さてその共通するあるものとは何でしょう？！

ヒント 1：それは二人の事を知らなくても容易に分かるもので、単純な答えです。

ヒント 2：それは不規則にちりばめられ、見つけるのは非常に難しいが、分かると何だそんな事かというような音楽主体の何かで、楽譜が読めないと見つけられないが、一般人でもそれをよく知っている。

ヒント 3：この後、例えば 93 小節以降や曲の最後にも同じ曲想の部分があるが、この 75～88 小節の間でしかそれは見出し得ない。

さあどうでしょう？分かった方は近江へこっそり耳打ちして下さい(^_^)正解者には**豪華プレゼント**が・・・あるかどうかはその時の気分で決めます。

さて、お遊びはこの辺にして真面目な解説に移るとしよう。。。

まずピアノ曲というのを思い立った時、自分がこれまで作曲のテーマの一つであったグローバリゼーションを使用するのが困難である事実に直面した。というのもピアノでは微分音を（大まかに言って）出せないからだ。

そこで今回が西村門下発表会である事から、大学 2 年の先生の授業で「仮に長 3 和音が有って、完璧にそれを崩せるのは第 3 音から半音下げた音を元の和音にぶつけければ良い」（意識。例：c-e-g の和音に es を加える）と仰られていたのを思い出し、長和音と短和音を使った順次進行式和音入れ替えをする事を思いついた。

といっても、本来は笙のようにいつの間にか次の和音へ移っている様な効果を実現したかったのだが、これまた残念ながらピアノは音が減衰してしまうので、音の入りの時点で沢山の音をクラスターの的に投入し、そこから抜いていく事で一つの和音が立ち上がるもの考えた。

と同時に、先ほど述べた長短和音とそこから着想を得た半音階的順次進行による和音の入れ替えをこの曲の根幹とする事とした。

次に（丁度譜例の箇所）、ここまでずっと volume が on の状態で進行して来たので、休符を取り入れ（といっても演奏者にとっては休符と成り得てないが）リズム構造体をそれまでの部分より細分化し、イレギュラーに分散させる事で作品に色を付ける事とした。この部分では逆に曲調の中心に C 音を持つてくる事によりその他の部分の不規則なエネルギーが一つに纏まるようにした。（なお先述の通り、この部分ではとあるものが仕組みられている）

次の部分は第四モチーフへの長大な以降部で、それまでの部分からの要素を少しずつ取り入れているが取り立てて説明するものはない。逆に第四モチーフ終了後の再現部への以降部はある意味、自分が一番やりたかったもので、以前作曲した Khonrioi I という木五の作品を知っている人はこの部分がより完成度を増せば作曲者の心臓部と成り得る事を知っているだろう。この部分は先ほど述べた笙のような和音の入れ替えをリズムの構造体の変化により実現しようと昔から試みているものの一種である。

第四モチーフは言ってしまうと自分の好みで書いた箇所、こういった所が上手く作用して聴き手にこの曲を愉しんでもらえれば嬉しい。この作品を書きながらずっと、手段が目的になる事は怖いと感じていた、こういった遊びの部分が入るのは三方にとって良い事ではないかと思う。

とはいえこういう箇所だと自分の音進行の癖が見え隠れし、それはそれで変な気もする。